

政権獲得以前のナチス・プロパガンダにおける新聞の役割

—その実態とイメージについて—

河 面 佑

1. はじめに

ナチス・プロパガンダ研究の中で、1933年の政権獲得以前に新聞・雑誌といった活字メディアが果たした役割は、常にかなり低く評価されてきたとあってよい。例えば、ブラッハー (Karl Dietrich Bracher) は『ドイツの独裁』の中で、ナチスの新聞は、宣伝による大衆の世論形成という点では、あくまでも副次的な要素にすぎなかったと指摘している⁽¹⁾。近年のナチス・プロパガンダ研究の中で、おそらく最も大きな反響を呼んだ研究書である『イメージの反乱—1933年以前のナチス・プロパガンダ』の著者ゲルハルト・パウル (Gerhard Paul) も、ナチスの宣伝観の中では、新聞・雑誌といった文章による宣伝手段は軽視されていたと述べ、集会・デモなど、人々の視覚イメージに訴えかける宣伝手段の威力を強調している⁽²⁾。

だが一方で、ナチスの新聞全体ではなく、個々の新聞の役割に焦点を当てた研究の中では、ナチスの新聞に対する評価は逆転する傾向にある。ローランド・レイトン (Roland Layton) はナチ党機関紙『フェルキッシャー・ベオバハター (Völkischer Beobachter)』(以下“VB”)のワイマール期における活動についての研究の中で、次のように述べている。「“VB”が国民社会主義運動の発展と、ヒトラーの勝利にどれだけ貢献したかを正確に把握することはできない。だが、新聞を拡張し、改良しようとする努力、機関紙に対する党の誇り、発行部数の確実な伸びなどを考慮すれば、“VB”が、ヒトラーのプロパガンダの主要な武器であったことは確かである⁽³⁾」。ゲッベルス (Joseph Goebbels 1897-1945) がベルリンで発行した新聞『アングリフ (Angriff)』についての研究書を著したラッセル・レモンズ (Russel Lemmons) は、ナチスの新聞の活動に否定的な意見に反論して、次のようにいっている。「『アングリフ』は国民社会主義がベルリンにおいて注目される上で重要な役割を果たした。この新聞はベルリンにおける国民社会主義の非常に困難な時期に誕生し、警察の妨害に対抗し、ナチズムの存在を維持させた⁽⁴⁾」。

新聞全体と個々の新聞という視点の違いがあるにせよ、ともに同じナチスの新聞を対象にしながら、このように相反する評価が生まれるのは何故なのであろうか。本論文では、このような政権獲得以前のナチスの新聞の評価に関する問題について、その実際の姿と、創り上げられたイメージという二つの視点から、検討していくことにする。

2. ナチス系新聞の実態

ここでは、政権獲得以前のナチス系新聞に関する様々な数値等に基づいて、その出版活動の実態について見ていくことにする。当時のドイツでは、政党の新聞活動の規模は、その政党が所有する新聞の数によって計られるのが一般的であったから、まずナチ党が所有していた新聞の数に関する資料を紹介したい。表1は、ナチス系新聞の数に関する同時代の記述の一覧であり、表2はペーター・シュタイン (Peter Stein) が自身の研究“NS-Gaupresse 1925-1933”の中で挙げている数値である。

表1 ナチス系新聞の数に関する同時代の記述

ヒトラーの回状 (1928年11月2日)
総数: 31 (日刊: 1 週刊: 28 月刊: 1 半月に一回: 1)
雑誌“Die Weltbühne” (1929年7月16日号)
「現在この党は、 半ダース あまりの定期刊行の宣伝書、 35 以上の週刊誌、 3 つの日刊誌そして 1 つの絵入り新聞を所有している」
ドイツ情報会議報告 (1930年4月28/29日)
1929年8月4日※ 週刊: 45 日刊: 4 ※ナチ党大会での報告
雑誌“Deutsche Presse” (1931年)
1930年2月中旬 総数: 70 (日刊: 44 週刊: 22 半週刊: 4)
雑誌“Literarischer Handweiser” (1931年3月号)
1930年末 日刊: 12 週刊: 34 絵入り: 1 ※ 月刊: 2~3 ※“Illustrierter Beobachter”
雑誌“Deutsche Presse” (1932年)
総数: 97 (日刊: 46 半週刊: 6 週刊: 38 半月刊: 1 月刊: 3 絵入り: 1 漫画: 2)
新聞“Deutsche Allgemeine Zeitung” (1932年3月4日号)
日刊: 49 以上 週刊および半週刊: 45 その他の定期刊行物: 約 40
書籍“Handbuch der Deutschen Tagespresse” (1932年)
1932年3月第一週 総数: 120 (週一回以上発行)

(以下の諸文献をもとに作成。Larry D. Wilcox, Hitler disciplines his press, in: *Gazette: International Journal for Mass Communication Studies*, vol.19, 1973, p.43; Pol, Heinz, Die Nationalsozialisten, in: *Die Weltbühne*, 25, Nr.29, 1929, S.78; Bracher, K. D. et al., *Staat und NSDAP 1930-1932*, Düsseldorf 1977, S.31; Schn.-Ldm., Wieviel nationalsozialistische Zeitung gibt es?, in: *Deutsche Presse*, 21, Nr.17, 1931, S.199; Sacher, Hermann, Das Schrifttum des Nationalsozialismus, in: *Literarischer Handweiser*, 67, H.6, 1931, S.326; A.S., Wieviel nationalsozialistische Zeitung gibt es?, in: *Deutsche Presse*, 22, Nr.6, 1932, S.69; *Deutsche Allgemeine Zeitung*, 1932.4.3., Nr.108; Deutsches Institut für Zeitungskunde Berlin(Hg.), *Handbuch der Deutschen Tagespresse*, 4.Aufl., Berlin 1932, S.27.)

表2 ナチス系新聞の数

		総数	月一・二回	週一回	週二回以上
1925年	3月	5	1	3	1
1926	3月	18	1	15	3
1927	3月	23	1	20	2
1928	3月	34	1	28	5
1929	3月	39	1	32	6
1930	3月	51	1	35	15
	9月	64	2	36	26
1931	3月	102	1	30	71
1932	3月	159	2	52	105
1933	3月	190	2	33	155

(Stein, Peter, *Die NS-Gaupresse 1925-1933*, München 1987, S.178 をもとに作成。)

一見して分かるように、同時期の数値でも、調査ごとにかんがりのばらつきがある。これは、政権獲得以前のナチスの地方支部には、幹部の私的な出版物や、不定期の刊行物など、党本部さえも把握できないような新聞・雑誌が多数存在しており、その正確な姿を把握することが困難であったためである。表1に挙げた雑誌“Deutsche Presse”の1931年の調査には、次のような記述がある。「この表に関連して今一度いっておかなければならないことは、この調査は完全なものではないということである。多少の不一致があることは確かであるし、さらにいえば、なお新たな[新聞の]創刊や、その形態の変化といったことが起こっているのである⁽⁵⁾」。なお、同じく表1中の“Handbuch der Deutschen Tagespresse”には、1932年当時のドイツ国内の新聞に関する様々な数値が載っているので、比較のため、ここで主なものをいくつか挙げておく。この時期のドイツの新聞の総数は4,703紙であり、そのうち政党の所有する新聞の数は、国家人民党32紙、中央党・バイエルン人民党603紙、社会民主党135紙、共産党49紙となっている⁽⁶⁾。発行部数は2,000部から5,000部の間のものが最も多く(740紙)、10万部以上は23紙(最大55万9千部)である。週の発行頻度は週1回が424紙、2回が287紙、3回が640紙、4回が72紙、5回が14紙、6回が3,001紙、7回が222紙、8回以上が39紙(4紙は届出なし)であった⁽⁷⁾。

続いて、出版物の発行部数に関する資料を挙げたいが、党の出版物の正確な量を把握することは、所有するプレスの数把握すること以上に困難なので、この点について厳密に調査したものは、ほとんど存在しないというのが実情である。特に、党の外部からこの点について調査したものは少ない。表1中の“Deutsche Allgemeine Zeitung”の1932年3月4日号に、日刊紙が75万から100万部、39の週刊紙と6つの半週刊紙の合計が、約35万部という記述が⁽⁸⁾、また1936年6月7日のゾパーデ(Sopade)報告「国民社会主義の新聞政策」の中に、「われわれは、1932年のナチ系新聞の総発行部

数は150万部以上ではなかったと見積もっている⁽⁹⁾』という記述がある程度である。

この点について調査したものとしては、ナチスの政権獲得後に、全国新聞部長オットー・ディートリヒ (Otto Dietrich 1897-1952) の命令で、ナチス中央文書館 (Hauptarchiv der NSDAP) がまとめた“Die statistische und geschichtliche Entwicklung der NS-Pressen 1926-1935” (以下“NS-Pressen 1926-1935”) という資料が最もよく知られている。この資料は、ハレ (Oron J. Hale) が自身の研究書“*The captive press in the Third Reich*”の中で用いて以降、ナチス系出版物の発展を示す最も重要な資料の一つとして、さまざまな文献に引用されている⁽¹⁰⁾。この資料は、ナチス系新聞に関するさまざまな数値を記した「統計部」と、個々の新聞の発展の経緯を記した「歴史部」との二部構成になっているが、ここではその「統計部」から、ナチス系新聞の発展を知る上で重要であると思われる、二つの数値を挙げる。

表3 ナチ党新聞の発行部数 (全国)

	総発行部数	増加量
1926年	10,700	
1927	17,800	7,100
1928	22,812	5,012
1929	72,590	49,778
1930	253,925	181,335
1931	431,444	177,519
1932	782,121	350,677
1933	3,197,964	2,415,843

(Hauptarchiv der NSDAP(Hg.), *Die statistische und geschichtliche Entwicklung der NS-Pressen 1926-1935*, München 1936, S.10 をもとに作成。)

表4 ナチ党新聞の発行部数 (ミュンヘン・上部バイエルン大管区)

	※VB	Don	O-R	C-B	C-Z	総計
1926年	10,700					10,700
1927	15,000	800				15,800
1928	18,100	1,000	200			19,300
1929	44,000	1,500	290	400		46,190
1930	153,500	1,800	300	600		156,200
1931	115,700	1,800	250	600		118,350
1932	109,200	2,200	250	750		112,400
1933	115,248	4,700	800	1,800	27,120	149,668

※[VB]Völkischer Beobachter, [Don]Donaubote, [O-R]Oberbayer. Rundschau, [C-B]Chiemgau-Bote, [C-Z]Chiemgau-Zeitung.

(Hauptarchiv der NSDAP(Hg.), *Die statistische und geschichtliche Entwicklung der NS-Pressen 1926-1935*, München 1936, S.21 をもとに作成。)

表1および表2から分かるように、ナチス系新聞の数は1930-1931年の時期、特に1930年9月の国会選挙でナチスが議席を大幅に獲得した、いわゆる「大躍進」以降の時期に急増している。このことは、ナチス系新聞はその数の増加によって党員を獲得してきたというよりも、むしろ党員の増加にともなって、その数を増やしてきたという側面が強いということを示唆しており、対外宣伝の手段としての新聞の効果に対して、疑問を投げかけるものとなっている。また、表3と表4とを比較すると、1926-30年の時期までは“VB”がナチス系出版物の大部分を占めていたことが分かる。このことから、1930年から31年にかけてのナチス系プレス発行部数の増加は、“VB”以外の新聞の数が増加したことが、大きな要因となったと考えられる。さらに、この時期には、日刊紙の数も急増しており、このような発行頻度の増加も、総発行部数の増加に繋がっていると思われる。

これらのことは裏を返せば、1930年以前には、“VB”以外のナチス系新聞は、発行部数の面からも、発行頻度の面からも、十分に機能していたとはいえないということの意味しているであろう。ハンス・A・ミュンスター (Hans A. Münster 1901-1963 ライプツィヒ大学新聞学研究所所長) は、著書『新聞と政治 (Zeitung und Politik: Einführung in die Zeitungswissenschaft)』の中で、この点について以下のように述べている。「国民社会主義の新聞は—“VB”は例外として— [ミュンヘン— 揆から] なお数年は、ほとんどその価値を認められていなかった。確かに1926年から1929年にかけて多数の週刊新聞が党員の献身的努力によって復活した。だが彼らは未熟で、人々はそれを近代的な新聞だとは見なさなかった⁽¹¹⁾」。戦後のハレやゼーマン (Z.A.B.Zeman) といった研究者も、ミュンスターと同様、政権獲得以前、とくに1930年以前のナチスの出版に関する活動は、あまり上手く機能していなかったと指摘している⁽¹²⁾。それらの研究の中で、新聞が機能しなかった原因とされているのは、主に次の二点である。

①資金の不足

政権獲得以前のナチ党の財政状況は苦しく、党のほとんどの新聞が財政難に苦しんでいた。前出の“NS-Presse 1926-1935”の「歴史部」には、そうした記述がいたるところに見受けられる。例えば、ヴェルテンベルク大管区の“NS-Kurier”は新聞発行当初の時のことを「見込みは決して良くはなかった。党員はなお数少なく、資金は手元にもなければ、手に入るあてもなかった⁽¹³⁾」と記している。表4にも挙げたミュンヘン・上部バイエルン大管区の“Chiemgau-Bote”は、度重なる発行禁止や編集者の投獄、罰金などによって、「悲劇的な財政状態」となったという⁽¹⁴⁾。バーデン大管区の“Führer”については「“Führer”の初期の様子は全て、わずかな言葉だけではっきりと言い表すことができる。資金の不足を、常に借金をすることによって補い、[中略] 記者としての能力を、精神的な力によって補ったのである!⁽¹⁵⁾」と記している。

財政が不安定であったため、政権獲得以前のナチスの地方新聞の経営は、ほとんどが小規模で、編集や印刷、配達といった出版に関わる作業の多くを、支持者のボランティア活動に頼っていた。

そのため、結果的にこれらの地方新聞は、多くの点で深刻な問題を抱えることとなった。ザール・プアルツ大管区の“NSZ. Rheinfront”は、資金不足のために、印刷に必要な紙の入手が困難で、「一回分の印刷が可能になって、ようやく一回分の発行ができた⁽¹⁶⁾」という有様だった。メクレンブルク・リューベック大管区の“Niederdeutscher Beobachter”は予約購読者に新聞を配達する手段として鉄道を利用していたが、新聞が汽車の時間までに準備できず、予約者の手に渡るのが発行の翌日になってしまうことが何度もあり、さらに「日々の鉄道による運送には、多くの資金が必要だったが、出版社はごくわずかな程度にしか[資金を]持っていなかった⁽¹⁷⁾」という。また、コブレンツ・トリーア大管区発行の“Nationalblatt”については「出版は借金とともに出発し、常に資金不足の状態から抜け出せなかった。金庫が空だったため、発行禁止、ボイコット、新聞運搬者による使い込みなどが、常に心配の種だった。厳しく料金を請求してくる印刷者との議論はひどいものだった⁽¹⁸⁾」と記している。

こうした状況に変化をもたらしたのが、1930年9月選挙でのナチ党の躍進であった。“Hamburger Tageblatt”の編集長であったアルベルト・クレープス（Albert Krebs）は、自身の回想録の中で「9月の選挙の大々的な成果によって、最終的に経済的な不安は解消された⁽¹⁹⁾」と述べている。実際に数多くのナチ系新聞が新たに創刊されたり、発行頻度を増やしたりしたことは、前述した通りだが、それでもドイツの出版界全体で見れば、ナチス系新聞の勢力はまだまだ優勢であるとはいえなかった。（その目標が達成されたのは、政権獲得によって他の競合紙を統合・廃止した後のことだった。）オットー・ディートリヒは、1932年7月27日付の報告書の中で、地方のナチ党の新聞が、すでにその地域に確固とした社会的・経済的地盤を持っているブルジョワ新聞や、社会民主党系新聞などの競合紙に取って代わるのは、あまりに困難であると述べ、むしろ既存のブルジョワ新聞に対して、それをナチスが利用できるように働きかけるほうが賢明であるとさえ主張している⁽²⁰⁾。さらにディートリヒは、「[1932年の現在まで]全国新聞部は、それ自身事務上の財政基盤を持っていなかったため、ただ助言やその方針を定めるといった形でしか、党新聞の財政的『合理化』等に協力できなかった」と述べ、党新聞や、その出版社が個々に財政的な問題の解決に取り組んでいる現在の状況に対して、全国新聞部がきちんとこれに対応しなければならないと指摘している⁽²¹⁾。

②組織・党員間の対立

前出のペーター・シュタインは、ナチスの地方新聞について、対外宣伝の手段としての役割よりもむしろ、党内の地域的・政治的グループごとの、内部コミュニケーションの手段としての役割を重視するべきだと指摘している⁽²²⁾。実際、党の出版活動はほとんどの場合、各地域・組織ごとに、個別に行なわれていた。そのため新聞は、広く様々なグループを抱え込むナチ党の分権的な傾向を強く反映するようになり、しばしば個々の党員同士の対立の要因とさえなった。

フランケンでは、ニュルンベルク・フェルト下部管区（Untergau）指導者ユリウス・シュトライ

ヒャー (Julius Streicher 1885-1946 後にフランケン大管区指導者) とゴットフリート・フェーダー (Gottfried Feder 1883-1941) とが、地域の出版の指導権をめぐる対立した。シュトライヒャーはフェーダーの新聞“Die Flamme”の新聞配達員に対して、フェーダーと手を切り、自身の新聞“Der Stürmer”を配達するよう働きかけたり、中部フランケンの大管区指導者に対して、“Die Flamme”を、中部フランケン大管区公認の新聞とするフェーダーとの協定を破棄するよう説得したりした。さらにニュルンベルクにおいては、シュトライヒャー派の人々に“Die Flamme”の宣伝を行わないよう指示し、結果的に同紙を販売停止に追い込んだ⁽²³⁾。

ベルリンでは、グレゴール・シュトラッサー (Gregor Strasser 1892-1934) と大管区指導者ゲッベルスとの対立があった。1926年にシュトラッサー兄弟がこの地に設立した「闘争出版社 (Kampf-Verlag)」は、“Die Berliner Arbeiter-Zeitung”など多くの日刊紙・週刊紙を発行し、党中央の「フランツ・エーア出版社 (Franz Eher-Verlag)」に対抗する存在であった。当時の『世界舞台 (Die Weltbühne)』誌は、出版面におけるシュトラッサーの活動について「新聞王シュトラッサーが、そう遠くない日に党首であるヒトラーを隅に追いやり、印刷所の事務室から党の手綱を握るだろうということとは明白である⁽²⁴⁾」と評している。

1927年4月23日に、この「闘争出版社」から発行された新聞“Der nationale Sozialist”に掲載された「人種混合のもたらすもの」というタイトルの記事は、シュトラッサーとゲッベルスとの間の激しい対立のひきがねとなった。その内容は次のようなものである。「精神というものを、原始的で、あらゆるものから影響を受けるもののように認識した場合、精神的な不調和は、常に肉体的なものに現れる。[中略] タレーランはえび足であった。彼の性格についてはよく知られている。[いやそもそも]『性格』などという言葉が彼に使われることなどない⁽²⁵⁾」。この記事を自らに対する中傷と受け取ったゲッベルスは、その報復として、自らの部下にシュトラッサーの新聞をサボタージュさせた⁽²⁶⁾。

このように、党員同士が新聞を介して互いに争うといった状況に対して、ヒトラー (Adolf Hitler 1889-1945) は1928年11月2日に出された回状の中で、次のように述べている。「私は今後、いかなる編集者であっても、公式、非公式を問わず、党員に対する攻撃を見つけしだい処罰し、また深刻な場合にはこれを党から追放する⁽²⁷⁾」。これに加えてヒトラーは、同じ回状の中で、それぞれの新聞同士の販売競争の自由については、基本的にこれを容認するとも述べている。まず、「新たに創設された新聞によって、すでに存在していた新聞が、より地域的な関心にそった新しい新聞に、その読者の一部を奪われるという悩ましい問題が生じてきた」とした上で、ヒトラーは、しばらく社会ダーウィニズムの理論を展開した後に、「新聞の間の競争についても同じことがいえる。自由に力を競い合えば、誰がより強者が分かるのだ⁽²⁸⁾」、と主張している。

だが、このようなヒトラーの訓告も、ほとんど効果がなかった。オットー・ディートリヒは前出の1932年7月の報告書の中で、全国のあらゆるナチス系新聞について、「なお自由競争の余地が与え

られていない⁽²⁹⁾」とし、その上で、「大管区の組織下でない数多くの新聞から、[大管区組織によって]『圧力』をかけられたり、その承認を受けられないといった、多くの不平不満の声が、全国新聞部に届いている。さらに、党組織下の新聞からも、その宣伝領域などにおける『組織的な縄張り争い』に関する申し出が、次から次と数多く提出されている」と述べ、各大管区の指導者たちは、その権力によって、党新聞の自然な発展を妨げていると批判している⁽³⁰⁾。結局、こうした新聞をめぐる黨員同士の対立は、政権獲得後もなくならなかった⁽³¹⁾。

全体的に見て、ナチスの出版物、とくに地方新聞は、対外宣伝という意味においては、あまり大きな役割を果たすことはできなかったと考えられる。その意味では、党の中央機関紙“VB”や、ゲッベルスが発行に携わったことで有名な『アングリフ』といった、対外宣伝の手段として知られている新聞は、ナチスの新聞活動全体の中では、むしろ例外的な存在であったとさえいえる。それゆえ、これらの新聞は、政権獲得後にナチス系新聞の「成功例」として、ナチスの「プロパガンダのプロパガンダ」の中で利用されていくことになるのである。

3. ナチスの新聞イメージ

次に、ナチスの宣伝観の中で、新聞がどのように捉えられていたのか、検討していく。ここでは、ヒトラーとゲッベルスの著作を中心に、ナチスの新聞観を見ていくことにしたい。

①ヒトラーの新聞観と『わが闘争』

ナチスの宣伝理論の最も重要な基礎となったのが、ヒトラーの『わが闘争』の中の宣伝に関する記述であったことは間違いない。この中でヒトラーは、大衆に対しては、新聞・雑誌などの「書かれた言葉」による説得よりも、演説など「話された言葉」によって直接訴えかける説得の方が効果的であると主張している。『わが闘争』の次の一節は、宣伝について論じたナチス側の文献や、ナチス・プロパガンダに関する多くの研究書に繰り返し引用され、「ナチスが新聞を軽視していた」という主張の重要な根拠となっている。「今日、文筆にたずさわる者や、[その力に]うぬぼれている者はみな、次のことをよく覚えておくがいい。すなわち、この世界における最も偉大な革命は、決してガチョウの羽根ペンによって導かれたものではないのだ!ということ。そうだ、ペンには常に革命を理論的に基礎付けることだけが残されている。だが、宗教的、政治的な種類の偉大な歴史的な雪崩を起こしたのは、はるか昔から話された言葉の魔力だけだった⁽³²⁾」。

ヒトラーは「話された言葉」が優れている理由として、演説者は、聴衆に語りかけることで、常にその反応から自分の講演の内容を修正し、「その時々聴衆の心に語りかけるために必要な、その場の感情に合わせてちょうど流れ出てくる言葉を、常に大衆から持ってくる⁽³³⁾」ことができるという点を挙げている。一方これに対して、文筆家は、大衆と直に触れ合うことがないので、その書物は「ある程度の心理的な鋭敏さ、そして後にはしなやかさを失う⁽³⁴⁾」としている。ヒトラーは、国

民の大多数を占める大衆を「非合理的で轻信」な存在であり、その場の感情に左右されると捉えていたため、そうした大衆の感情に直接訴えかけることこそが、大衆へのプロパガンダにとって有効であると考えたのである⁽³⁵⁾。

前述のように、ヒトラーのこうした主張が、ナチスは新聞を軽視していたという主張の根拠の一つとなってきたのだが、実は、ヒトラーは同じ『わが闘争』の中で、「書かれた言葉」である新聞の重要性についても論じているのである。新聞の大衆に対する影響力についてヒトラーは、「大衆を意味するこれらすべての人々にとって、新聞の影響はまったく驚くべきものであるだろう」と述べ、「国民の中では精神的にもっとも単純な部分」である大衆は、「半ば無能から、半ば無知から、白地に黒く印刷して提供されたものを全部信じる」、と先ほどの記述とは一見矛盾するかのような主張を展開している⁽³⁶⁾。

この点について理解するための手がかりは、ヒトラーのマルクス主義新聞に対する記述の中にある。ヒトラーは「マルクス主義の新聞は扇動家によって書かれている⁽³⁷⁾」という。つまり、大衆に訴えかける術を良く心得ている扇動家が書く、社会民主主義の新聞は「書かれたものではなく、語られたもの」であり、集会やデモなどとともに大衆に影響を及ぼすのだというのである⁽³⁸⁾。自ら「私は宣伝活動に、まさしく社会主義的=マルクス主義的組織が老獪な技量で使いこなし、使用法を理解していた道具を見たのである⁽³⁹⁾」と語るヒトラーにとって、活字メディアの新聞も、扇動的な形式で書かれていれば、大衆宣伝のための理想的な宣伝手段たり得たのである。

ヒトラーはまた、新聞というメディアが独自に持つ役割として、とくに「国民の教育」という点を強調している。この点での新聞の重要性は「いくら高く評価しても過大評価されることはない⁽⁴⁰⁾」、とまで述べており、そうした観点から、新聞に対する国家の役割について、次のようにいっている。「これらの人々 [大衆] がより低劣な、より無知な、あるいはまったく悪意のある教育者の手に落ちるのを妨げることは、最も重要な国家、および国民の利益である。したがって、国家はかれらの教育を監視し、あらゆる不正を阻止する義務を持つ。国家はその際、とくに新聞を監視しなければならない。なぜなら、新聞の影響は一時的ではなく継続的に作用するため、これらの人間 [大衆] にとってきわめて強烈で、しかも効果的であるのだ⁽⁴¹⁾」。国家による新聞監視の重要性を説く主張は、すでに1920年2月24日に公表されたナチ党の綱領の中に盛り込まれており（第23条）、政権獲得後のナチスが、新聞・雑誌の規制に乗り出したことから、新聞に対するヒトラーのこのような認識は、ナチ党の中で広く共有されたものであったといえる。

このように、『わが闘争』の記述を先入観なしに読んでみれば、「話された言葉」の威力の方が勝っていることを強調しながらも、その一方で、活字メディアである新聞の影響力も決して否定してはいないことが分かる。そもそも、前述の通り、政権獲得以前のナチスにとって、新聞というメディアは、「話された言葉」の優位という宣伝観のゆえにあえて利用しない宣伝手段であるというよりも、むしろ、利用したくても現実問題として十分に利用することのできない手段だったのである。

おそらく、「話された言葉の威力」というヒトラーの主張の背景には、自身の演説家としての経験だけでなく、出版面で苦戦する政権獲得以前の党の現状を正当化しようとする意図も込められていたのではないだろうか。いずれにしろ、先行研究の中でいわれてきたような「ナチスが新聞を軽視していた」・「新聞の重要性は低かった」といった評価は、そのままの形では妥当なものとはいえないであろう。そのことは、1932年3月にヒトラーが行なった次のような呼びかけからも分かる。「国民社会主義者の諸君！プラカード・集会・演説といったわれわれのプロパガンダは、世界中からずば抜けたものとして驚きの目をもって迎えられている。われわれの新聞についても同じ様になるよう、諸君の理解と協力をお願いしたい⁽⁴²⁾」。

後の研究の中で、ヒトラー自身の新聞を評価する言葉が、ほとんど無視されてしまうようになった要因としては、まず「話された言葉」の優位を説く『わが闘争』の一節の口調がきわめて断定的で、印象に残るものであったということが挙げられるだろう。だが、それ以上に重要なのは、政権獲得以前のナチスの宣伝活動に対する周囲の関心が、新聞よりも、集会や演説といった「話された言葉」による宣伝の方に向けられていたという事実である。当時の観察者の多くは、『わが闘争』の記述を引用しつつ、ナチスの「話された言葉」による宣伝の威力を記述していた。例えば、1932年に刊行された雑誌『新聞学 (Zeitungswissenschaft)』には次のようにある。「国民社会主義の大規模な集会活動を観察すれば、われわれは彼らのこれまでの成功が、数字の上からも、羽根ペンや輪転印刷機よりもむしろアドルフ・ヒトラーが『わが闘争』の中でいう『話された言葉の魔力』によるものだと確信するのである⁽⁴³⁾」。このような観点から、とくに新聞の力に依らない1930年9月選挙での躍進は、新聞の威力に対する脅威とさえ受け止められた。“Literalischer Handweiser”の1931年3月号は、ナチスの新聞の力がこれまでごく僅かなものにすぎなかったのに選挙で多くの人がナチ党に票を投じたことについて、「長い間重要視されてきた、選挙における新聞の影響力というものが、今日それほど強力なものではなくなってきている、という一般的に容易に確信されうる事実を改めて示している⁽⁴⁴⁾」、と評している。ドイツ新聞学の指導者的存在だったエーミール・ドーフヴィファト (Emil Dovifat 1890-1969 ベルリン大学教授・新聞学研究所所長) も、こうした状況に対して、「しばしば声高に叫ばれて来た、政治を導いていくという役割における新聞の全能なる力に、ある程度の動揺が見受けられる⁽⁴⁵⁾」とし、新聞・雑誌の指導力は「確かに大衆の奥深くには入り込めないのだ⁽⁴⁶⁾」とまで述べている。こうした同時代のイメージが、後のナチスの新聞観についての研究に、少なからぬ影響を与えたことは想像に難くない。そして、結果的に『わが闘争』は、そうしたイメージを裏付ける証拠とみなされることになったのである。

②ゲッベルスの新聞観と『ベルリン奪取』

ヒトラーと同様に、ゲッベルスの場合にも、新聞の重要性を説く発言を数多く見出すことができる。例えば、『アングリフ』の1929年11月2日号に掲載された「新聞の偉大な力」という論説記事

の中で、ゲッベルスは次のように述べている。「新聞を手にする者は、世論を手にする。世論を手にする者は、真実を手にする。真実を手にする者は、権力を占有するようになるのだ⁽⁴⁷⁾」。こうした記述から、ヒトラーの宣伝観の影響を受けたゲッベルスも、新聞の威力を決して軽視してはいなかったことが窺える。

ゲッベルスの新聞観を表した資料としてよく挙げられるのが⁽⁴⁸⁾、1931年に刊行されたゲッベルスの著作『ベルリン奪取 (Kampf um Berlin)』である。この著作は、主にベルリンにおけるナチスの宣伝活動（警察による弾圧・突撃隊の活動・『アングリフ』の発行等）についてゲッベルス自身が記したものであるが、随所に『わが闘争』の宣伝理論を土台にした記述が見られ、例えば大衆を獲得する事の重要性や、「話された言葉」の優位など、基本的な部分については、ほぼヒトラーの考えをそのまま受け継いだものになっている。

この『ベルリン奪取』の中で、ゲッベルスは「われわれの目標は報道することではなく、刺激し、焚きつけ、煽り立てることであった⁽⁴⁹⁾」と述べ、ヒトラーと同様に報道よりも煽動を重視するスタイルの重要性を強調している。ゲッベルスがそうした新聞の具体例として挙げているのが、彼自身の新聞『アングリフ』である。『ベルリン奪取』では、『アングリフ』上で、ベルリンの警視總監ベルンハルト・ヴァイス (Bernhard Weiss 1880-1951) を、権力を振りかざすユダヤ人の象徴として攻撃した様子などが描かれており、こうした積極的な宣伝活動の結果、ベルリンの新聞界で『アングリフ』は「次第に重要視され、尊敬される⁽⁵⁰⁾」ようになり、1927年末には「街角でも、仕事場でも、乗合自動車の中でも、また地下鉄の中でも、人々はいつもこの新聞の噂をしていた⁽⁵¹⁾」と、その影響力の大きさを誇示している。

では、実際の『アングリフ』の活動はどのようなものだったのだろうか。『アングリフ』の年間の発行部数については、“NS-Press 1926-1935”に1931年58,300部、1932年110,600部という数字が挙げられているが⁽⁵²⁾、1930年以前の数値については、1934年に起こった火事によって、資料が失われてしまったため、不明であるとされている⁽⁵³⁾。この時期の数値について、ゲッベルスは『ベルリン奪取』の中で、1927年7月4日に初めて『アングリフ』が発行された時の部数は2,000～3,000部であり⁽⁵⁴⁾、1927年10月29日のゲッベルスの誕生日には、2,500名の『アングリフ』の新規予約購読者の名簿を贈られたと述べている⁽⁵⁵⁾。だが、この数値には、誇張が含まれている可能性がある。“NS-Press 1926-1935”の「歴史部」・『アングリフ』の項には、創刊直後から警視總監ヴァイスの妨害に遭い、一回の発行部数が1,200部から900部に減少したという記述がある⁽⁵⁶⁾。さらに、ゲッベルス自身も1929年1月5日の日記の中で、300件の予約購読の新規獲得に対して、「信じがたい成果。われわれは非常に運が良い⁽⁵⁷⁾」と記している。

これらのことを総合して考えると、『アングリフ』も1930年以前は他のナチス新聞と同様、その経営規模はかなり限られたものであり、発行部数を伸ばしていったのは1930年以降のことであると考えられる。実際、週刊紙として出発した『アングリフ』が日刊になったのも、1930年12月のこ

とであり、“NS-Presse 1926-1935”はその理由を、初期の頃は有力な資金源がなかったためだと説明している⁽⁵⁸⁾。400万都市であった当時のベルリンで、『アングリフ』がどれだけの影響力を持っていたかは、はっきりとは分からないが、少なくとも、『ベルリン奪取』の中でゲッベルス自身がいっている程の（そして、しばしば『アングリフ』に関する研究の中でいわれている程の）劇的な影響力は持っていなかったと考えるべきであろう。

ナチスの政権獲得後に出版された日記『カイザーホーフから内閣官房へ (Vom Kaiserhof zur Reichskanzlei)』の中で、ゲッベルスは、党の新聞の手法や、編集者の質、あるいは資金不足のために思うにまかせない出版状況などを、しばしば嘆いている。例えば、1932年1月4日の日記には「新聞は最悪だ。われわれには世界で最も優れた演説家がいるが、有能で熟練した文筆家がない⁽⁵⁹⁾」、と記している。また、翌日には「資金は常に足りない。調達しようにも、われわれに対して信用貸しをしてくれる者がいないので、困難である⁽⁶⁰⁾」と記し、さらに1932年10月1日には「われわれのジャーナリストたちは、選挙の際に主に大事になってくるのが、新聞の宣伝効果であるということをおそらく理解していない。彼らはたいてい [考え方が] 根本に向かいがちであり、黒魔術 [的な宣伝] よりも、むしろ学問の方に適している⁽⁶¹⁾」、と嘆いている。こうした言葉からは、新聞というメディアの影響力や重要性を評価しながらも、それを有効に利用することができないことに対する、ゲッベルスの苛立ちを読み取ることができる。そのようなゲッベルスの想いが、自らの新聞『アングリフ』を「ナチ党新聞の理想像」とする『ベルリン奪取』の記述のもとになったのではないだろうか。

4. まとめ

ナチスの新聞活動に関する、戦後の研究の流れは、主に二つの方向に向かうことになった。一つの流れは、政権獲得以前のナチス・プロパガンダのイメージや、『わが闘争』の「話された言葉」の重要性を説いた箇所などの影響から、「ナチスが新聞を軽視していた」・「新聞の重要性は低かった」という否定的な評価をする方向に向かった。もう一つの流れは、ゲッベルスの『ベルリン奪取』の中の記述などから、『アングリフ』や、当時から党機関紙の中で特別な地位を与えられていた“VB”など、「宣伝効果が高かった」新聞を、ナチス系新聞の典型と見なすことで、積極的に評価する方向に向かった。

だが、本稿を通じて論じてきたように、こうした評価はどちらも問題を抱えている。まず、ナチスの宣伝観の中で、新聞の重要性が意識されていなかったわけではない。ナチス系新聞が苦戦していた原因は、先行研究やナチ体制期のプロパガンダの中でいわれてきたような、「話された言葉」を重視するナチス・プロパガンダの先進性などといったものよりは、むしろ資金不足・組織の未成熟さといった、より現実的な問題によるものだった。この点については、今後より一層の検討が必要であると思われる。また、そうした状況から考えて、政権獲得以前のナチスの新聞・雑誌といった

「書かれた言葉」によるプロパガンダが、対外宣伝の道具として多大な効果を発揮したか、疑わしい。その点では、これまでの研究の中における、『アングリフ』など特定の新聞に対する評価は、見直される必要があるだろう。ナチス・プロパガンダ研究には、創り上げられてきたイメージに捕われず、その実像を捉えていくという作業が不可欠であろう。

注

- (1) K・D・ブラッハー著、山口定／高橋進訳『ドイツの独裁Ⅰ』岩波書店、1975年、274頁。
- (2) Paul, Gerhard, *Aufstand der Bilder: Die NS-Propaganda vor 1933*, Bonn 1990.
- (3) Layton, Roland V., *The Völkischer Beobachter, 1920-1933: The Nazi Party newspaper in the Weimar Era*, in: *Central European History*, vol.3, 1970, p.382.
- (4) Lemmons, Russel, *Goebbels and Der Angriff*, Lexington 1994, p.128.
- (5) Schn.-Ldm., *Wieviel nationalsozialistische Zeitung gibt es?*, in: *Deutsche Presse*, 21, Nr.17, 1931, S.199.
- (6) Deutsches Institut für Zeitungskunde Berlin (Hg.), *Handbuch der Deutschen Tagespresse*, 4.Aufl., Berlin 1932, S.27*. 国家人民党の党首フーゲンベルク (Alfred Hugenberg 1865-1951) は、当時ドイツ国内に一大メディア・コンツェルンを形成しており、1929年のヤング案反対のキャンペーンで国家人民党と共闘した際に、ナチスはフーゲンベルクのメディア・コンツェルンを自らの宣伝のために利用したことが知られている。クルト・コスズィークはその研究書の中で、国家人民党の新聞について、1922年約600紙、1928年約500紙という数字を挙げている。Koszyk, Kurt, *Deutsche Presse 1914-1945, Geschichte der deutschen Presse, Teil.3*, Berlin 1972, S.240.
- (7) Deutsches Institut für Zeitungskunde Berlin (Hg.), a.a.O., S.27*.
- (8) *Deutsche Allgemeine Zeitung*, 3.4.1932, Nr.108.
- (9) N.N., *Das deutsche Zeitungswesen*, in: Klaus, Behnken (Hg.), *Deutschland-Berichte der Sozialdemokratischen Partei Deutschlands (Sopade) 1934-1940*, Bd.3, Frankfurt am Main 1980, S.819.
- (10) Hale, Oron J., *The captive press in the Third Reich*, Princeton/New Jersey 1964, p.59. 同じくこの資料を引用している研究としては、例えば、Koszyk, a.a.O.やWilcox, Larry D., *The Nazi press before the Third Reich: Völkisch press, Kampfblätter, Gauzeitungen*, in: Homer, F.X.J./Wilcox, Larry D. (eds.), *Germany and Europe in the era of the two World Wars*, Charlottes 1986 などがある。
- (11) Münster, Hans A., *Zeitung und Politik*, Leipzig 1935, S.92.
- (12) Hale, op.cit., pp.39-61; Zeman, Z.A.B., *Nazi Propaganda*, 2.ed., London/Oxford/ New York 1973, p.24.
- (13) Hauptarchiv der NSDAP (Hg.), *Die statistische und geschichtliche Entwicklung der NS-Presse 1926-1935*, München 1936 [未刊行]、S.372.
- (14) Ebenda, S.221.
- (15) Ebenda, S.45.
- (16) Ebenda, S.277.
- (17) Ebenda, S.197.
- (18) Ebenda, S.250.
- (19) Krebs, Albert, *Tendenzen und Gestalten der NSDAP*, Stuttgart 1959. S.85-86.
- (20) Stein, Peter, *Die NS-Gaupresse 1925-1933: Forschungsbericht-Quellenkritik- neue Bestandaufnahme*, München 1987, S.252.
- (21) Ebenda, S.253.
- (22) Ebenda, S.175.
- (23) Hüttenberger, Peter, *Die Gauleiter*, Stuttgart 1969, S.63-64.
- (24) Pol, Heinz, "Gregor der Große", in: *Die Weltbühne*, 26, Nr.16, 1930, S.566.

- (25) Heiber, Helmut, *Das Tagebuch von Joseph Goebbels 1925/26: Mit weiteren Dokumenten*, Stuttgart 1961, S.120.
- (26) Wilcox, Larry D., *The Nazi press before the Third Reich*, pp.97-98.
- (27) Wilcox, Larry D., Hitler disciplines his press, in: *Gazette: International Journal for Mass Communication Studies*, vol.19, 1973, p.41.
- (28) Ibid., pp.41-42.
- (29) Stein, a.a.O., S.251.
- (30) Ebenda, S.252.
- (31) ゲッベルスは1936年10月18日の日記に次のように書いている。「国民社会主義の新聞はしょっちゅう対立している。それによって、しばしば党内に不和が起こるのだ。こうしたことはやめさせなくてはならない。これは一方が他方に勝とうとすることから起こる。突撃隊 [の機関紙] しかり、親衛隊 [の機関紙] しかり、ヒトラー・ユーゲント [の機関紙] しかりだ。私はこれを調停しなくてはならない。」Fröhlich, Elke, *Die Tagebücher von Joseph Goebbels: Sämtliche Fragmente*, Teil I, Bd.2, München/New York/Paris 1987, S.700.
- (32) Hitler, Adolf, *Mein Kampf*, Bd.1, München 1925, S.110. (邦訳: 平野一郎/将積茂訳『わが闘争 (上)』角川書店、2001年、147頁。) 前出のブラッハーやパウルも、こうした『わが闘争』の記述を、その主張の根拠の一つとしている。
- (33) Hitler, *Mein Kampf*, Bd.2, München 1927, S.112. (邦訳: 平野一郎/将積茂訳『わが闘争 (下)』角川書店、2002年、132頁。)
- (34) Ebenda, S.111. (邦訳: 同前、131頁。)
- (35) ヒトラーの大衆観、およびその起源については、拙稿「ナチス・プロパガンダにおけるイメージ宣伝者としてのナチス」『西洋史論叢』第28号、2006年を参照。
- (36) Hitler, *Mein Kampf*, Bd.1, S.254. (邦訳: 『わが闘争 (上)』、312頁。)
- (37) Hitler, *Mein Kampf*, Bd.2, S.114. (邦訳: 『わが闘争 (下)』、134頁。)
- (38) Ebenda, S.114-115. (邦訳: 同前、134-135頁。)
- (39) Hitler, *Mein Kampf*, Bd.1, S.185. (邦訳: 『わが闘争 (上)』、232頁。)
- (40) Ebenda, S.253. (邦訳: 同前、311頁。)
- (41) Ebenda, S.255. (邦訳: 同前、313-314頁。) この点についてのヒトラーの認識は、初期の頃から政権獲得後まで、常に一貫していた。例えば、1923年4月27日の演説では「われわれは、新聞を国民の自己育成機関にするよう要求していかなければならない。」と述べている。また、1942年6月8日にも「新聞の重要性から見れば、[それに匹敵する] 国民育成の手段など、ただごくわずかしかないのだ。」と述べている。Jäckel, Eberhard/Kuhn, Axel, *Hitler Sämtliche Aufzeichnungen 1905-1924*, Stuttgart 1980, S.916, Picker, Henry (Hg.), *Hitlers Tischgespräche im Führerhauptquartier 1941-42*, Bonn 1951, S.289.
- (42) Institut für Zeitgeschichte (Hg.), a.a.O., Bd.IV/3, S.273.
- (43) N.N., Die Presse der Nationalsozialistischen Deutschen Arbeiterpartei im Überblick, in: *Zeitungswissenschaft*, 7, Nr.3, 1932, S.182.
- (44) Sacher, Hermann, Das Schrifttum des Nationalsozialismus, in: *Literarischer Handweiser*, 67, H.6, 1931, S.326.
- (45) Dovifat, Emil, Neue Aufgaben der deutschen Publizistik, in: Müller, Oscar (Hg.), *Krisis: Ein politisches Manifest*, Weimar 1932, S.256.
- (46) Ebenda, S.260.
- (47) Goebbels, Joseph, *Der Angriff: Aufsätze aus der Kampfzeit*, München 1937, S.197.
- (48) 『ベルリン奪取』は下記の著作でも重要な資料として紹介されている。Bramsted, Ernest K., *Goebbels and National Socialist propaganda 1925-1945*, Michigan 1965; Heiber, Helmut, *Joseph Goebbels*, Berlin 1962; Marvell, Roger/ Fraenkel, Heinrich, *Doctor Goebbels*, London/Melbourne/Toronto 1960. (邦訳: 樽井近義/佐原進訳『第三帝国と宣伝—ゲッベルスの生涯—』東京創元新社、1962年。)

- (49) Goebbels, *Kampf um Berlin*, München 1932, S.190.
- (50) Ebenda, S.264.
- (51) Ebenda, S.278.
- (52) Hauptarchiv der NSDAP (Hg.), a.a.O., S.15.
- (53) Ebenda, S.5.
- (54) Goebbels, *Kampf um Berlin*, S.200.
- (55) Ebenda, S.281.
- (56) Hauptarchiv der NSDAP (Hg.), a.a.O., S.99.
- (57) Elke, Fröhlich (Hg.), *Die Tagebücher von Joseph Goebbels*, Teil. I , Bd.1/III, München 2004, S.158.
- (58) Hauptarchiv der NSDAP (Hg.), a.a.O., S.96.
- (59) Goebbels, *Vom Kaiserhof zur Reichskanzlei*, München 1934, S.17.
- (60) Ebenda, S.18.
- (61) Ebenda, S.173.